

「佐伯文庫」おぼえがき

井 尾 義 徳

江戸時代天下に知られた文庫として、わが国文庫史上に大きな位置を占める佐伯文庫は、豊後佐伯藩第8代藩主毛利高標の創設したものである。毛利2万石の居城「鶴屋(谷)城」は、現市街地の西北城山の上にあったが、その麓三の丸にほど近い大手門の傍らに、安永6(1777)年、藩校「四教堂」^{しこうどう}を設立した毛利高標は、4年後の天明元(1781)年には、蔵書の整理と保管、藩校教育の充実を目的として、三の丸城内に「佐伯文庫」を創設した。3棟の御書物倉は書庫および御書物奉行所から成り、創設以来の蔵書は質量ともに充実、高標の没した享和元(1801)年のころには、まさに汗牛充棟の様相を呈していたといわれる。

佐伯文庫の蔵書には、伝統的な漢籍四部分類法でいう「経・史・子・集」はもちろん、卜占・農・医から戯曲・小説類、更に百科叢書の類にいたるまで多様なものが含まれ、漢籍としては宗・元・明代の初版本をはじめとし古版本が多い。また、大分県立図書館に特別貴重書として保管されている5部12冊の洋書には、「佐伯文庫」の印記が見られることから、洋書類もかなり収蔵されていたものと推測されている。

毛利高標の収書の方法は、清やオランダの船が長崎に入港するたびに、文庫係や書物奉行を派遣し、貴重書や珍書の購入に当たさせたが、時には書誌学に通じた高標自らの目で確かめて購うという積極的なものであった。その結果、世に「稀覯書八万卷」^{きこうしよ}と喧伝されるほどの著名文庫となったのである。

その8万卷と伝えられてきた佐伯文庫の蔵書数については、その大部分が創設者毛利高標一代の収書によるものといつてよい。その数は8万卷とも8万冊とも伝えられてきたが、佐伯文庫の研究の第一人者故梅木幸吉氏の調査によれば、8万卷4万冊を超える蔵書数であったことが分かっている。その調査の基となっているのは、高標没後5年に幕府の要請で佐伯藩が提出した蔵書目の写し『毛利家蔵書目』『佐伯書目』(いずれも国立公文書館の内閣文庫に収蔵)などであり、書目によって計数に異同があるが、それらを勘案して出された数値である。ただこれは漢籍のみで、和書・洋書は全く含まない。

さらに梅木氏は、上記2書目の他に『佐伯献書目録』『佐伯文庫現存古書分類目録』等の資料を加えて照合勘案の上、佐伯文庫旧蔵書と思われるものを尽く網羅して収録したとされる『佐伯文庫蔵書目』(同氏著、1984年)において、およそ11万卷・4万7千冊という総数を出された。これには高標以降の当主が収集した毛利家御手許本や、藩校四教堂収蔵書、判明した洋書類等をすべて含んでいる。

ところで、高標没後26年、文庫創設から46年を経た文政10(1827)年、第10代藩主毛利高翰^{たかなか}の世となって、高標の収書8万卷4万冊の中から、ほぼ半数に当たる2万冊余の貴重書が幕府に献上された。理由には諸説があつて判然としないが、この質量ともに充実した献書の実実は、国内に数ある文庫の中でも「古今未曾有の盛事」として、世の学識者たちを驚嘆させたという。

なお、当時の書物奉行秋室明石大助の手に成る『佐伯藩献書目』によって、献書の正確な数は、〔1,653部 2万111冊、医書90部 647冊、計1,743部 2万758冊〕と判明しており、約2万冊が

佐伯に残ったことになる。

これら大量の献上本の行方としては、まず紅葉山文庫、昌平坂学問所、江戸医学館の3機関の書庫に分配、収蔵され、明治維新後は一括して新政府に移管された。そして、その後数次の変遷の末に、国立公文書館の内閣文庫に1万2,122冊、宮内庁書陵部（旧図書寮）に4,999冊がそれぞれ収蔵され、合わせて1万7,121冊が現存していることになる。これは献書総数2万758冊に対して3,637冊の不足であるが、幕府崩壊や大震災、東京空襲に敗戦後の混乱を考えれば、8割以上の現存率をむしろよろこぶべきであろう。これに引き替え、献書されなかったおよそ2万冊の漢籍は、漢籍以外を含めても約3,800冊2割足らずが現存するに過ぎない。

その非献書本の現存個所としては、地元佐伯の市立図書館が当然最も多く2,968冊、国立国会図書館240冊（未調査あり）、大分県立図書館（28冊）、伊勢の豊宮崎文庫（現神宮文庫）64冊などの外、実は中国に里帰りした佐伯文庫本が、北京大図書館に434冊、北京図書館に6冊、さらに美国国会図書館（美国は我が国の米国に当たる。即ち Library of Congress のこと）に49冊、計489冊あることが判明している。これらに、わずかではあるが個人4人に保管されている4冊を加えた3,805冊が、前述の「2割足らず」ということになる。さらに、この3,800冊には、高標以降の御手許本・四教堂本などを含むことを考えれば、実質的な残存の割合はさらに僅少とならざるをえない。

さて、佐伯文庫の蔵書印について、いささか興味あることがらに触れておきたい。佐伯文庫の蔵書印には2つの種類があった。その一つは、5.5センチの正方形陽刻の印で、「佐伯侯毛利／高標字培松／蔵書画之印」の15文字が篆書体で彫られており、「佐伯侯、毛利高標、^{あざな}字は培松が蔵する書画の印」と訓むことができる。もう一つは、縦15センチ、横4.5センチの長方形で、「佐伯文庫」の4文字が同じ篆書体で彫られている。

前者の角印は、献上本にはそのすべてに朱印として押捺されているが、後者の長方形印は、大分県内残存本にのみ押捺されているという。さらに県内に残存する一部の書籍には、前者の毛利侯の印が押され、その上方に後者の「佐伯文庫」印が押されているところから、前者は佐伯城内三の丸に文庫が創設される以前から使用され、後者は幕府に献上した前後からの使用であろうと、梅木氏は推定されている。けだし、佐伯文庫4文字長方形印は、献書後の捺印と見てよいのではないかと思われる。

また、高標没後幕府に提出した蔵書目の表紙には『毛利家蔵書目』とあり、『佐伯文庫』の名称は全くない。前述の明石秋室作成の献書目録も、『佐伯献書目録』とあって『佐伯文庫献書目録』とはなっていない。

このようなことから推論すれば、最初は「御文庫」などと呼ばれていたものが、高標没後自然的に「佐伯文庫」と呼ばれるようになり、蔵書印として「佐伯文庫」の長方印を用いるようになったのは、おそらく幕府献書以後のことではないかと思われる。

昨年9月北京を訪れた際、北京大学までタクシーを走らせたが、構内に入ることも許されなかった。しかるべき手順を整えて、再度北京大学所蔵の佐伯文庫本に面会する機会を得たいものと思っている。また、伊勢の神宮文庫に架蔵の64冊についても現地調査を目論みたいと考えている。

（いお・よしのり 短期大学部生活文化科）